野呂有子「Milton の英雄観　その 2」『東京成徳短期大学紀要』第 12 号（1979）35−40.

Milton の英雄観―その二―

野呂有子

（Ⅳ）“Sonnet XVII”[1]について

前回の論文[2]で、クロムウェルに宛てて書かれたソネットの主旨が、政治権力の宗教への介入を阻止せよというものである事を明らかにしてきた。クロムウェルへのソネットが書かれた後、僅か数週間の内に[3]、やはり信仰の自由を擁護するソネットが、Sir Henry Vane the Younger[4] (1613－62)に宛てて書かれている。これは、通常“Sonnet XVII”と呼ばれている。本稿では、なぜ同じ主旨のソネットが二首、ほぼ同時期に書かれたか、又、この事実がどういう意味を持つのかを考察する。それが、Milton の英雄観という問題につながっていく事は言うまでもない。

To Sir Henry Vane the Younger

Vane, young in years, but in sage counsel old,
Than whom a better senator ne’er held
The helm of Rome, when gowns not arms repelled
The fierce Epirot and African bold.
Whether to settle peace or to unfold
The drift of hollow states, hard to be spelled,
Then to advise how war may best, upheld,
Move by her two main nerves, iron and gold
In all her equipage: besides to know
Both spiritual power and civil, what each means,
What servers each, thou hast learned, which few have done.

---

(1) このソネットも、それが捧げられた人物が共和政府の大立物の一人であった為に、1673 年出版の *Poems* にはのせられていなかったが、ケンブリッジ・マニュスクリプトや Phillips の *Letter of State* (1694)、又 George Sikies の *The Life and Death of Sir Henry Vane* (1662)にのせられている。

(2) 「ミルトンの英雄観」『東京成徳短期大学紀要』第 11 号（昭和 53 年）

(3) Sikies に、July 3, 1652 とある。cf. *Complete Prose Works of John Milton*, Gen. ed., Don M. Wolfe vol. IV, 174, (New Haven: Yale Univ. Press.1953－).

(4) 同名の父親を Henry Vane the Elder として区別して、このように呼ばれる。独立派の指導者の一人として共和政府で活躍した人物である。Charles I の処刑には反対であったが、王政復古後、処刑される。cf. *Dictionary of National Biography*, “Henry Vane the Younger” の項。

The bounds of either sword to thee we owe;

Therefore on thy firm hand Religion leans

In peace, and reckons thee her eldest son.(5)

訳

ヴェインよ、あなたは若いながらも賢い裁断を下す事には長じている。

あなたよりも手腕のある元老院議員が、ローマの舵を取った事はかつてなかった。

武器ではなく、上衣(トーガ) [政治力] が、あの残虐なエピラスの人[ピュロス]や、かの大胆不敵なアフリカの人[ハンニバル]を撃退した時でさえも。

和平を調停するにせよ、不可解な、偽りに満ちた国々の策謀を発(あば)くにもせよ。

更には、戦(いくさ)が、盛り上りを見せ、すっかり武装をととのえて、鉄 [戦力]と金 [経済力] という二つの強力な柱に支えられて、どうしたら最も有利に進んでいくかを指導するにせよ。

その上、霊的な力と世俗的な力の両者を理解し、それぞれが何を意味し、何がそれぞれを分離させているかをあなたは既に学んでいる。これは殆ど人の成し得ない所だ。

どちらの力の領域を定めるにも、私達はあなたを頼りにする。

それゆえ、あなたの揺るぎないその手に、宗教という母親は、平安の内にすべてを委ね、あなたを自分の長子と考えている。

この Vane へのソネットは、Fairfax や Cromwell に宛てて書かれたものとは、次の二点で大きく違っている。第一に、その構造がある。“Sonnet XV”と“Sonnet XVI”が、それぞれ、三層の構造を持つものである事は、前回の論文で指摘した(6)。しかし、“Sonnet XVII”では事情は違っている。このソネットは、大きく前半（1～9 行〔前半〕）と後半（9〔後半〕～14 行）に分かれるという構造を持っている。第二に、前のソネットが、二首共に「賞賛から勧告へ」という流れを持っていたのに対し、このソネットでは「勧告」に当たる部分はない。Vane は一貫して「賞賛」され続けるのだ。(7)

(5) Dennis H. Burden, ed., *Shorter Poems of John Milton* (1970; rpt. London: Heinemann, 1973) をテキストとした。

(6) 『ミルトンの英雄観』pp.39－41

(7) J. H. Finley, “Milton and Horace”, *Harvard Studies in Classical Philology, xlviii* (1937),

我々は、まず、“Sonnet XVII”の構造から考えて行く事にしよう。

Vane へのソネットの前半のテーマは、政治・外交問題における彼の手腕の素晴らしさである。Milton は、第 2〜4 行においては、Vane をローマ共和制の政治家に比較して称えている。ピュロス（306－272 B. C.）とハンニバル（247－183 B. C.）は、何度もイタリアに侵入しようとした外敵である。ここで私達は、ピュロスを「武力ではなく政治力によって」撃ち破った Claudius（307 B. C. から 296 B. C. までのローマの執政官[8]）や、ピュロスからの賄賂を断固拒否し、遂には彼を撃ち負かした Fabricius（282 B. C. から 278 B. C. までローマの執政官）[9]を思い起こす。又、ハンニバルをザマの海戦[10]で老 Scipio が撃ち破った話は有名である。つまり、Milton は、Vane を Claudius や Fabricius、更には Scipio にも伍する英雄として称えているのだ。

続く五行（第 5〜9 行〔前半〕）では、英国が当時直面していたオランダとの戦争を背景として、彼の政治的手腕が称えられている。

このソネットが書かれるのと前後して両国は戦争に突入した。主に海上覇権をめぐっての事である。Vane は戦争を回避しよう（“settle peace”）と努めたが、ひとたび戦争が開始されると、参謀本部の中枢として活躍した。“hallow states”とは、具体的にはオランダを指して Milton が洒落ている訳である。[11]

詩人は、第 3〜4 行で、我々に外敵とのローマの戦いを想起させた。そして、第 5〜9 行では、「外敵との戦い」のイメージによって、我々を当時の英国へと立ち戻らせる。第 3 行の“gowns not arms”や第 8 行の“her (war's) two main nerves, iron and gold”という古典的な表現[12]は、古典的世界と当時の英国を効果的に結びつけている。

---

p.61; William Riley Parker, *Milton*: *A Biography*, (1968; rpt. Oxford: Clarendon Press, 1969), vol. I, 414

(8) *Second Defense* (1654)に Phyrrus との関連で Claudius への言及が見られる。cf. E. A. J. Honigmann, ed., *Milton's Sonnets* (London: Macmillan, 1966), pp. 159－160.

(9) M. Y. Hughes, ed., *John Milton*: *Paradise Regained, the Minor Poems and Samson Agonistes* (New York: The Odyssey Press, 1937), p. 48; John Carey and Alastair Fowler, eds., *The Poems of John Milton* (London: Longmans, 1968), pp. 1114－1115.

(10) Scipio が、ミルトンの時代に、真の英雄の一つの型とされていた事については、『ミルトンの英雄観』p. 44 註(32)を参照されたい。

(11) A. S. P. Woodhouse and D. Bush, eds.,“The Minor English Poems”(1972), *A Variorum Commentary on the poems of John Milton*, Gen, ed., M. Y. Hughes. (London: Routledge & Kagan Paul; New York: Columbia Univ. Press, 1970－), vol. II, 428.

(12) 二つの表現の内、前者は、Cicero, *Philippics*, v.2. cf. Finley, p. 62; *A Variorum Commentary*, pp. 428−429; A. W. Verity, ed., *Milton's Sonnets*. (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1961), p. 52, 等を参照した。

以上の事から、“Sonnet XVII”の前半では、古典的な雰囲気の中で政治家 Vane が詠われているのは明らかだ。

詩の前半のテーマが、Vane の政治的手腕であるのに対し、後半のテーマは、宗教問題における彼の見識の深さである。彼は「霊的な力と世俗的な力の両者を理解し……何がそれぞれを分離させているか」を学んでいる（第 9〔後半〕～11 行）。「どちらの力の領域を定めるにも」彼は無くてはならない人物なのだ（第 12 行）。

1652 年に入って、国営教会設立の動きが、John Owen を中心として顕在化した事は既に述べた[13]。Milton は、こうした策動を警戒して、Cromwell に宛てて“Sonnet XVI”を詠んだのだった。しかし、Cromwell は一向に腰をあげようとはしない。それで、Vane が Cromwell を諫める事を期待して“Sonnet XVII”が詠まれたのであろう。

Milton が Vane に期待するのは理由のない事ではなかった。若い頃、Vane はニュー・イングランドに渡り、23 歳でマサチューセッツの知事に選ばれるが、ある女性の信教の自由を擁護して、そのために職を失っている[14]。政治と宗教が分離した状態を理想形態と考える Milton は、Vane を同志と見做している。政治権力は宗教問題に介入してはならないのだ。

結句の二行は（Ⅱ. 13－14）、Biblical な落ち着いた雰囲気を持つものとなっている。「宗教」は Vane を「長子」としてその「手」にすべてを委ねているという。聖書中の人物として我々が思い浮かべる「長子」と言えば、Moses であり、Abraham であり、Isaac であり、そして Jesus Christ である[15]。彼らが皆、神の道の正しい信奉者であり、神の代弁者であった事は、今更、言うまでもない。宗教問題においての見識の深さを称えるのに、これ以上の賞め言葉はないだろう。

「宗教」という母親が、長子にしっかりと支えられて安心し切っているというイメージは、ソネット全体を安定した落ち着きのあるものしている。この事は、“Sonnet XVII”の結句を“Sonnet XV”や“Sonnet XVI”と比較する事によって、一層明確になる。“Sonnet XV”では、

---

(13) 「ミルトンの英雄観」p. 41.

(14) *Complete Prose Works*, IV, 174−175.

(15) この「長子」という語の出典について John S. Smart は、*The Sonnets of John Milton* (Glasgow: Maclehouse, Jackson and Co., 1921), p. 99 で、*Genesis* xlix. 3.の“Reuben, thou art my firstborn”の箇所をあげているが、必ずしもこの箇所にこだわる必要のない事は本稿で明らかであろう。

in vain doth Valour bleed

While Avarice and Rapin share the land.

勇気はただ徒(いたずら)に血を流す。

貪欲と強奪が国土を共有するその間は。

と、内容的にも、国内の惨状を憂い、音韻的にも破裂音〔d〕,〔b〕や摩擦音〔v〕,〔ʃ〕の効果的な用法により、怒りを吐き出すような強い調子でソネットを終結させている。又、“Sonnet XVI”では、

Help us to save free conscience from the paw

Of hireling wolves whose gospel is their maw.

我々を助けて傭われ狼どもの爪から自由な良心を救いたまえ。

やつらの福音とはその胃袋なのだ。

と、危険を切実に訴え、脚韻の二つの〔ɔ:〕で深い詠嘆を示している。

“Sonnet XVII”の「安定感」を音韻的に強調しているのは〔i:〕の音(おん)である。この音は“peace”という語の基調音となっていると共に、結句で“lean”,“peace”,“thee”と三回繰り返されている。それだけではない。実は、この音は、“Sonnet XVII”の後半に顕著に認められる。詩の前半では、ただ一度、五行目に“peace”が認められるだけだが、後半では十行目に“each”,“means”,十一行目に“each”,十二行目に“thee”,十三行目に“lean”,十四行目で“peace”,“thee”という具合である。又、僅か十四行の詩において、“peace”,“each”,“thee”の語がそれぞれ二度ずつ使われている事も見落としてはならない。「平和」(“peace”)とは、宗教と政治の分離(“each”)の内にこそ見出されるべきであり、その務めは、Vane(“thee”)に委ねられているのだ。[16]

以上、“Sonnet XVII”の構造についてまとめると次のようになる。

---

[16] 〔i:〕の音が“Sonnet XVII”において宗教的安定を示す上で効果的である事は以上から明らかだが、Joseph H. Summers は *The Muse's Method: An Introduction to "Paradise Lost"* (London: Chatto and Windus, 1962), pp. 176−185 で、*Paradise Lost* (1667) の第十巻で発される、神と人との契約の証としての“woman's seed”の〔i:〕の音が第十一巻、第十二巻で効果的に響き、遂には“redeem”に到達するとしている。論者野呂は、『楽園の喪失』において宗教的救いの基調音として働いている〔i:〕の音は、既に“Sonnet XVII”(1652)の中においても宗教的安定の基調音として使われている事をここで強調しておきたい。

（1）大きく二部に分かれる。（第 1〜9〔前半〕行と第 9〔後半〕〜14 行）

（2）前半では英国の対外的危機がとりあげられ、後半では国内における危機がとりあげられている。

（3）前半のテーマは Vane の政治的手腕であり、後半のテーマは彼の宗教問題に対しての洞察力である。具体的に言えば、前半では、オランダとの紛争の解決を扱い、後半では、政治と宗教の分離の問題を扱っている。

（4）前半の雰囲気は古典的であり、後半の雰囲気は Biblical である。

（5）結句の二行が効果的に働いて、全体として安定した落ち着きのあるソネットになっている。

今までの分析から、“Sonnet XVII”が政治と宗教という二極の構造を持つものである事は明らかとなった。Smart は、このソネットに関して、Vane は「市民的自由」（“civil liberty”）と「宗教的自由」（“freedom of religion”）の融合（“reconciliation”）を求められていると指摘しているが[17]、これは、Milton の英雄観を考えるにあたって、非常に示唆に富んだ言葉である。以下、市民的自由と宗教的自由という問題について考えて行こう。

この問題に関しては、Milton はいくつかの pamphlet の中で言及している。例えば、*The Reason of Church Government* (1641)では、教会統治の要綱は聖書に定められており、それに人が手を加えるのがいかにおろかしい事であるかをくり返し述べて[18]、暗に、政治権力が教会統治に介入するのを戒めている。又、*The Defense of English People* (1651)では、宗教の問題は教会の規律に帰するものであり、市民としての問題は為政者（法律）に帰するものであり、長い間キリスト教国に争いが絶えなかったのは、為政者と教会とがそれぞれの務めを混同していたからであるとしている[19]。更に、“Civil Power in Ecclesiastical Causes” (1659)では、市民的なものと宗教的なものを為政者は区別するべきであり、その区別ができて初めて為政者たり得るのだと主張している[20]。もはや、Milton が、市民的自由と宗教的自由の区別を認識し両者を調和させ得る為政者の中に理想の英雄の姿を認めているのは疑う余地がない。

そして、この事は、*Paradise Regained* (1671)においても同様である。

---

(17) Smart, p. 45.
(18) *Complete Prose Works*, I, 750－756.
(19) Cf. Smart, p. 96.
(20) *Ibid*., p. 97.

Christ は、自分を、古代ローマ社会の実在の人物と絶えず比較している[21]。第二巻四四六行ではローマ共和制の政治家達を Quintius, Fabricius, Curius, Regulus と名指しで称えている。Phyrrus (“the fierce Epirot”)を倒した Fabricius の名が見えている事は、“Sonnet XVII”との関連でしっかりと捉えておくべきであろう[22]。そして続けて Christ は言う。

…but that I
May also in this poverty as soon
Accomplish what they did, perhaps and more [23]

Christ は、ローマ共和制の政治家達の中に英雄の一つの型を見ている。しかし、彼らはあくまでも古い型の英雄であって、Milton の理想とする英雄には及ばない。だから、Christ は、「彼らの成し遂げた事を私は成し遂げ、そしてたぶんそれ以上の事を成し遂げよう。」と言うのだ。「彼らの成し遂げた事」とは、外敵から国を守り、国政を安定させる事、つまり、「市民的自由」の確立であろう。そして、「それ以上の事」とは「宗教的自由」の確立に他ならない。

“Sonnet XVII”の前半で、Vane は元老院議員に比較され

Than whom a better senator ne’er held
The helm of Rome
あなたよりも手腕のある元老院議員が、ローマの舵を取った事はかつてなかった

と称えられているが、これにも同様の事が言える。元老院議員達は「市民的自由」の為の戦いにおける勝利者ではあっても、「宗教的自由」の為の戦いに勝利者ではなかった。

Milton は、“Sonnet XVII”の前半においては、Vane を「市民的自由」の勝利者として称え、後半においては、「それ以上の事」、つまり、「宗教的自由」の勝利者として称えている。

為政者が、「市民的自由」だけでなく、「宗教的自由」を確立して初めて真の平和が生まれる。“Sonnet XVII”のこのテーマは、その安定した二部構成によりしっかりと支えられて

(21) Hughes, p. 409.
(22) Scipio については註(10)を参照されたい。更に *Paradise Regained* の中で三度に亘って Scipio が言及されている事も見逃せない。cf. *P. R.* Ⅱ. 199－200; Ⅲ. 34－35; 101.
(23) *P. R.* Ⅱ. 450－452.

いる。

“Sonnet XVII”が、作品として安定した完成度の高いものであるという事実は、“Sonnet XV”や“Sonnet XVI”と比較する時に、一層重要な意味を持ってくる。そして、この問題は、“Sonnet XV”と“Sonnet XVI”に見られた「勧告」の部分が“Sonnet XVII”には見られないと言う第二の問題と密接に関わってくる。

Milton の場合、作品の完成度の高さと低さという事は、特に、書かれた時期が近い場合には、歌われている人物への Milton の評価の高さ低さを示す事になるのではないだろうか。つまり、Fairfax や Cromwell よりも Vane へのソネットの完成度が高いものであるという事は、Milton が Vane をそれだけ高く評価しているという事に他ならない。成程、Fairfax と Cromwell は、英雄の型にのっとってソネットで詠われてはいる。彼らの功績もある程度は認められている[24]。しかし、彼らには「より崇高な」務めが残されている。「勧告」の意義はここにある。Milton は、Fairfax と Cromwell を、真の英雄としての務めを果たす以前の段階にいる者として描いているのだ。それに対して Vane は完成された英雄として描かれている。Milton は、形式と内容の両面から、Fairfax や Cromwell と、Vane とを区別して扱う事によって、自分の三者に対する評価の違いを我々に示しているのである。

Smart は、*Second Defense* (1654)が、Cromwell 批判を含んでいる事は認めながらも、“Sonnet XVI”(1652)が書かれた時点では、Milton は、まだ Cromwell を信頼し彼の偉大さを高く評価しているとし、当時のような動乱の時代に、Milton が未来を予測する事ができなかったのは仕方のない事であると弁護して[25]、Cromwell への Milton の評価が二年の間に大きく変わったかのように述べているが、私はこの意見には同意できない。

“Sonnet XV”(1648)は別として、“Sonnet XVI”と“Sonnet XVII”は一ヵ月と間をおかずに書かれたものであり、その両者を貫いているのは、「政治と宗教の分離」というテーマである。それでいて、Cromwell は英雄の前段階として描かれ、Vane は完全な英雄として描かれている[26]。1654 年の *Second Defense* における Cromwell 批判の根は既にここにあると見て間違いないだろう。

---

(24) 『ミルトンの英雄観』pp. 38－42.

(25) Smart, pp. 89－91.

(26) “Sonnet XVII”の十一行目の“which few have done”という言葉からも、これは明らかとなる。

以上から、本稿の冒頭で示された「なぜ同じ主旨のソネットが二首ほぼ同時期に書かれたか、又、この事実はどういう意味を持っているか」という疑問は解決された。

Milton は、政治権力の宗教の介入に対して強い危機感を持っていたのである。相次いで書かれた二つのソネットの内容と完成度の違いは、Vane の中に理想の英雄の姿を見ると共に、Cromwell への不信感を表明するものとなっている。そして、彼の理想の英雄の一つの型として、「市民的自由」と「宗教的自由」の違いを認識すると共に、両者を融合させる為政者の姿がある。

参考文献

Barker, Arthur E. *Milton and the Puritan Dilemma, 1641－1660.* Univ. of Toront Press, 1942. Rpt., 1971.
Hill, Christopher. *Milton and the English Revolution*. New York: The Viking Press, 1978.
Steadman, John M. *Milton and the Renaissance Hero*. Oxford: The Clarendon Press, 1967.
『世界の歴史』４．東京: 筑摩書房、1961.